

流 浪 の 賦 (3) G. G. Byron

楠 本 哲 夫

1819年4月24付で バイロンはロンドンの親友 ダグラス キネアド宛にヴェニスから 書き送った。

＜先月から僕は ラヴェンナの町の ^{伯爵}伯爵夫人 ^{テレサ}Teresa ^{グイッチョリー}Guiccioli ———
夫は60才の ^{伯爵}Count ^{グイッチョリー}Guiccioli ———を恋する仲となった。 彼女は芳紀 17
才。 薔薇の花の如く ^{はな}華やかに明るく ^{あで}艶やかにして美しく 温かい。 フ
ランス語も自国語と変らず意のままにあやつりラテン語で歴史に精通し 詩文
を好み暗んじ、絵画を得意とする。云々。＞

テレサ ^{グイッチョリー}グイッチョリー 伯爵夫人は ^{ラヴェンナ}Ravenna の貴族の娘で 16才まで天
主教女子修道院 で 上流貴族階級子女のための淑女教育を受け それを^お了え
るとすぐ、懇望されて 富裕の^{グイッチョリー}グイッチョリー伯爵のもとへ ^{かし}嫁づいた。

当時 イタリア は オーストリアの支配下にあり＜イタリアとは 一つの
地理的名称のみ＞ と オーストリア宰相メッテルニヒの豪語した如く、彼の
民権抑圧政策が欧州全土を支配していた。

事実 イタリア という国はなく、 ネーブルズ王国、ローマ法王領、タスカニー公領、モディーナ公領、パルマ公領、サルディニア王国、オーストリア領 ヴェニス、オーストリア領 ロンバディア はあった。

国はこのように分割され その主権は多くオーストリア皇家の親王と フランスのブルボン家の一族を戴いていた。 しかし——

人種はイタリア人で 国語はイタリア語であり、歴史と伝統と慣習は イタリアであった。

細胞分裂をした イタリアの一つの心臓は統一の息吹^{いぶき}を求めて 革命運動が蜂起しつつあった。

かかる風潮のもとに 流浪の身をよせた、この地において 叛逆の熱き血潮が いま バイロンの胸に たぎりつつ、 かつ、 テレサ との＜数奇なめぐり合い＞^{ちゆうづ} による＜宙吊りの 愛の生活＞ が はじまった。

バイロンの＜豪毅果敢、大胆不敵＞は パラドキシカルなく従順にして 愛により^{すが}縛る＞ その性格を^{あら}露わに 見せつけて みづから、＜この愛の生活＞^{うべな}を肯い 甘受した。——そして 祖国英国では これをききつけて^{むらすずめ} 群雀たちが口々にバイロンに 罵声をあびせつつ 騒ぎたてたが……。

兎にも 角にも、 テレサ ギッチョリーとバイロンとの愛の生活は 数奇なめぐり合い によって はじまる。

＜チャイルド ハロールド＞ は、 ＜ドン ジュアン＞は、 いづこを^{きすら}漂泊い いづこの岸へ 辿りつこうとするのか。

＜宿命の星＞のもとに生れし バイロン卿は、 父＜^{マッド ジャック}Mad Jack＞（気狂いジャック）よりも もっとスキャンダラスな＜非道御前＞の汚名を、世の呪いのこえを もろに浴びながら、いま—— 流浪の生活 を^{きす}漂泊らう。

当時 イタリアの慣習では＜結婚後一年を経て後は 一人に限って 公然と
愛人をもつ＞ことを許されていた。

ヴェニス社交界の女王 ベンゾニー 伯爵夫人の応接室で 始めて バイロ
ンに会ったときの印象を テレサは ＜バイロン卿の思い出＞ の中で 次の
如く 語っている。

＜バイロン卿の 高貴、優雅、美しい客貌、その声の音調、身ごなし のす
べてが、妖しく、私の心を惹きつけた、そして 深い印象を刻みつけてしま
った。＞

ベンゾニー伯爵夫人の応接室を出ようとしているテレサが つと歩みよっ
たバイロンに握手をあたえたとき その手に小さな紙片がのこった。 それに
は —— 次回の^{デート}会見の 日時と場所が記されていた。 かくて 彼女は、
それから 毎日 バイロンと会うことになった。

テレサは ある意味では かつてのバイロンの熱狂的な愛人だったカロライ
ン ラムよりも、もっと一徹にして 熱狂的愛人 となった。 そして失意、
放浪の身のバイロンにとって 彼女は——カロラインが、得意満面、意気軒昂
たりしバイロンのロンドン時代に対した場合と比べて——最初の出会いから
すでに＜より有利な立場＞に立っていたことは、明らかであった。

果して ——

テレサは バイロンが彼女の愛人となるための資格として バイロンに 次
の如き条件を呈示した。

一つ、＜生涯 イタリアを去らないことを誓うか？＞

一つ、＜テレサが行くところは どこへでもついてくることを約束するか？＞

テレサは 総明にして 知的な 慎重な女性だった。この国では＜結婚は単なる形式にすぎなかった＞、だが しかし、＜恋人を選ぶことは 慎重な態度を必要とした。＞

テレサより その2つの条件を呈示されて バイロンは ハタと当惑した。それは恰も 胸元に^{短刀}dagger をつきつけられたような思いだった。

今、バイロンの心に去来すること—— ハロー校のとき、メリー チョワースから 受けた失恋の傷手、そして、それから 立直ったとき、心に誓ったこと、それは、＜ヨージ、俺は、この、びっこの醜いアヒルを 美しい^{スワン}白鳥に変えてみせる＞ と。そして バイロンは実に＜涙ぐましい忍耐と意志＞の力で、見事、人も羨む、あの、文壇 随一の美貌を創りあげた。その幼き日 バイロンは、その誓いと 同時に 心の中で決意したことは、＜将来、あらゆる美しい女性を自分の膝下に^{ひざまず}脆かせてみせる、！＞と。それが生涯の＜バイロンの対女性観＞であつたはずだ。だが、バイロンは 今、即座に^{はら}肚をきめて このテレサの 2つの条件をすべて呑み、＜テレサの 騎士的愛人＞となることを誓った。

かくて テレサは バイロンに許し、 バイロンは＜随身の騎士＞として 公然たる愛人となった。

しかし テレサは 美しい透きとおるような膚の持主にありがちな、蒲柳の質で、胸の病をえて ^{ラヴェンナ}Ravenna に転地して 療養に勵まねばならぬことになった。

＜ バイロンが 身近に侍ること以外は 病を療やす方法はない ＞ と主治医から バイロンに テレサは 伝言させた。

このような 状況で とるものもとらず 急拠 ヴェニス から ラヴェンナに バイロンは 駆けつけた。

そして、ヴェニスの家は そのままにして、ラヴェンナ の地に 移りすむことになった。

《ダンテの予言》(The Prophecy of Dante) はバイロンが1819年6月、^{テレサ}Teresa ^{グイッチョリー}Guiccioli 伯爵夫人を訪れたとき、彼女の要請によって ^{ラヴェンナ}Ravenna でかかれたものである。

ヴェニスを発ち

バイロンは 6月10日、ラヴェンナに着いて ダンテの墓所のすぐ近くに住所を構えたが、まだ、ヴェニスから 数頭の馬も、 蔵書も、あらゆるヴェニスでの所持品は到着していなかった。

そのとき テレサ、グイッチョリー伯爵夫人は バイロンに、ダンテのことでなにか詩^{うた}ってほしいと要請した。そのような 状況下にバイロンは テレサを満足させるため、かつ、暇つぶしのため、筆をとって一気呵成に、勞せず、かきあげられたのが、《ダンテの予言》である。

バイロン みづからは ^{ジョン}John ^{マレー}Murray に あてた手紙の中で、

“もし、不明瞭な点がなければ 今まで私がかいた詩の中では 最高の出来ばえであると思う。”

と評している。しかし——バイロンとワーズワスとは 共通点はたいしてないとしても 二人にいえることは みずからの作品に関するかぎりにおいてその批評眼の全面的に欠けている という点であろう。

この《‘The Prophecy of Dante’》が、バイロンがかいた多くの詩の中で最高傑作であるとは 決していえないし また それは＜不明瞭＞でもない

この詩の中で あまりにも瀝然と あの ‘On this day I complete my thirty-sixth year’ に 窮局的には到達したバイロンの＜心的状態の推移＞—— 病的状態——自己憐憫——強迫衝動——自己破壊衝動——へのバイロンの最初の段階をよみとることができる。

^{グイッチョリー} Guiccioli 伯爵夫人へ 献げた ソネット《‘Dedicatory Sonnet’》——彼女の要請にこたえて《ダンテの予言》をかくにあたり献げた——の中で イタリアの詩聖 ^{ダンテ} Dante ^{アリギエアリ} Alighieri (1265—1321) をバイロンは、＜The great Poet Sire＞＜偉大な詩人の父祖：＞(世界に君臨した帝王的最高の偉大な詩人)と呼んでいるが バイロンが 久しい間、ダンテを 偶像的に崇拝してきたことは みずから、そのように ダンテをよんでいることから考えて はっきりと認めてよいだろう。

Dante が 数世紀を経てのち なお Chaucer や Milton, イギリス ロマン派詩人に 多大な影響を及していることから考えても バイロンが＜The great Poet ^{うなづ}Sire＞とよび、最高の敬称を ダンテに贈っていることは 十分に肯けることである。

バイロンの ^{メアリー} Mary ^{ダッフ} Duff への、あの、幼き日の 淡い恋心は Dante の ^{ベエィアートルーチエイ} Beatrice への愛とかなり相通するものであり、快い、スウィートな共鳴音を奏でている。

そしてまた このイタリーの詩人ダンテの＜不幸な結婚と追放＞ は バイロン みずからの それと 全く一致している如き 先鞭的道行であった。

ダンテが イタリーの同胞たちへ与えた、あの＜爆発的名声＞が いま バイロンに あの、束^{つか}のまでであった 自分の祖国 英国での 爆発的 Byr'n … Byr'n … Byr'n … の人気名声を想起させた。

ワーズワス の持論＜偉大な詩人にして かつて 即座の名声、人気をかち得たものは一人としてなかった。＞——それは ^{ウィリアム}William ^{ワーズワス}Wordsworth が 当代のイギリス人、同胞から絶大の人気、名声を博することができなかったことを意味するが—— これに対し 懐疑的であった バイロンは次の点を指摘している。

＜ダンテの詩は 彼の死の以前から すでに久しく 異例の名声 人気を博していた。 さらに加えて、ダンテの死後 諸の国内権力は ダンテの遺体のひきとりを求めて談合しあいそして また、《ダンテの神曲》《^{ディヴィーナ}‘the Divina ^{コメディ}Commedia’》(1307—1321) の長編詩の詩作の場所をめぐる多くの論議がとりかわされている。＞

バイロンにとって——^{アーノルド}M. Arnold も、そのように断定したが——きわめて 重要だったことは、実に、 ダンテが シェクスピアの対抗勢力として、その作品中で、きわめて重大な古典的真価、そして ヨーロッパ的真髄を具現化した唯一の詩人、あまたの近代詩人中、抜群であったという点である。

ダンテは 過去の世界から語りつづけている＜生きたこえ＞である。

Homer, virgil, Horace, Sappho もまた、過去から語りつづけるこえである。そしてバイロンにとって、とても 貴重なこえである、だが、それらは 生きたこえ ではない。

シェイクスピア は 生きたこえである、そして バイロンにとって貴重である、だが それは 過去の世界から語りかけるのではない。

バイロンは イタリアにすんで この権威ある〈生きたこえ〉を身をもって 直接に その耳できき Virgil — 70-19 B.C, ローマ第一の詩人。Augusta 帝の宮廷詩人を通して 過去の世界と直接に触れあい その伝統を通じて 近代世界を^{はだ}膚で感じた。

その〈絶えない変遷の流れ〉の中に バイロンは、〈みずからの姿を現す〉ことができた。そしてこのことは とても バイロンにとって 重要なことであった。 何故なら————

他の詩人たちが みな みずから 憩うことを希求するに反し バイロンは〈つねに 流れ動いているもの〉の中から、—— 過去のもの、動きつつあるもの、やがてくるであろうもの 即ち 歴史的現実という相の中において みずからも 動きつつ唄う 詩人であるから。バイロンは〈行動の詩人〉である。

ダンテが クリスマンであり、 実に 神学的詩人である ということは バイロンにとって さほど重要なことではない。なぜなら バイロンは〈教義的^{とうり}甲羅〉の背後から なんとかうまくしのび込むという機知に^た長け——それを肯定するのでもなく 拒絶するのでもなく——それが表現する〈原形的 祖形的真理に〉到達することができる才覚をもっているから。

ダンテがより若き日の放浪生活において多大の意味をもつようになっていた 回教的 そしてスーフィ<Sufi>——スーフィ教徒、回教の汎神論者——的的文化の中に ダンテの 別の詩想のルーツがあることを バイロンが感知し得た と考えてよい。

もし——バイロンが 長生きしていたとすれば ますます ダンテの影
響力に染まっていったらうことは 明らかだと 信じていいだろう。

というのは、バイロンは <自己の作品の背後的アクセント>を この点に
発見し それを鍛え 制御していった。この点に<類型的活力>を発見した。

上述の如き事情のもとに詩想が練られたにもかかわらず《The Prophecy of
Dante》が<成功を収めた作品 ではなかった>と記録されているのは いか
ん である。

それは——そこに登場してくる人物が<最悪なるバイロンの相> <‘自
己を憐れみ 俗世間を呪うバイロン の相> であるからなのである。

最初 この作品は その成功が期待された。この詩の出発点は 実に見事
に始まり、ダンテが <神曲>の、あの、すさまじいまでの[・]未[・]来[・]的[・]経[・]験[・]をたず
さえて 現れてくれる。

Once more in Man's frail world! which I had left

So long that 'twas forgotten; and I feel

The weight of clay again, —too soon bereft

Of the Immortal Vision which could heal

My earthly sorrows. . . .

はかなき^{うつしよ}現世に^{かえ}蘇りく また、

遠き昔に^{わかれ}袂別しゆえに 忘れ果てたわ 俗世のすべて。

ずしりと重き^{つちくれ}土塊の この身、

^{つか}束の間に ^{うばはれ}剥奪し、不滅の透視力、

そは——哀しみを療やせしものを、^い吾が^わ濁世^{にごりよ}を生きこしとき

三韻句法 < ^{テアツア リーマ} terza rima >——イタリア詩形の一つ。三行一組の iambic 体で aba, bcb, cdc…のように押韻する——を織り混ぜた この韻律の形式もまた いわゆる < mobil context > (変り易い流れ) ——バイロンの世界観——に自由な活動の視野を与えるものとの期待がもてた。

だが 難点は これが流動的ダンテではないことである。これは、敗北し、追求されたダンテについてのバイロン流の一つの解決で 終始 がみがみまくしたてる 不快な調子が出しゃばっている。

ダンテの^{こうぜつ}口舌を通して < バイロン みずからの挫折 苦しさ 復讐への^{かわ}喝き > が叫ばれる。しかし——

ここでは あの ^{タッソー} Tasso のおかれた立場に対して バイロンが感じた如き 迫真性 直接性は 不在であるはずで つまり 地下牢 暴虐 失恋 といったものは ないはずである。

ゆえに ダンテに対しては あの^{タッソー}タッソーに対して抱いたと同じ人間的同情は感じえないはずである。 < 地下牢 > と < 追放 > とは全く別問題であるから。

< ^{タッソー} Tasso > の場合、 < ^{地下牢} dungeon > は ^{ねら}狙うべき関連語 であって しかるべきだが バイロンは < ^{ダンテ} Dante > の場合も、 ^{第一篇} Canto I の終末あたりで < 無人島に置き去りにされた船乗り > というイメージ の中に 有効な連想語句を付与せんと試みている。

For I have been too long and deeply wrecked
On the lone rock of desolate Despair,
To lift my eyes more to the passing sail
Which shuns that reef so horrible and bare:
Nor raise my voice——for who would heed my wail? (I, 138-42)

荒涼たる＜絶望＞の孤島の岩で
 わが船 大破せしより久し
 過ぎゆく帆を見仰ぐも
 避けゆく 恐怖の、露な暗礁。
 救助は求めず——叫ぶも空し

しかし この場合——

＜deeply wrecked＞ は まづい文句 であり ＜wail＞は 厳しい 壮大な
 詩聖ダンテの 風格に対して 侮蔑的文句 の如き ひびきを与える。

また 自己憐愍の情が 自伝的バイロンのとても退屈な一面相としての復讐
 の執念に汚染されている。

... my lone breast may burn
 At times with evil feelings hot and harsh,
 And sometimes the last pangs of a vile foe
 Writhe in a dream before me, and o'erarch
 My brow with hopes of triumph, —let them go! (I, 105-09)

孤独なこの胸 ときに煮る
 あつき 荒れたる邪念に炎えて。
 ときに、悶ゆる臨終の喘ぎ
 奸敵 のうち 夢に勝利の
 希み 懸れば——いざ駈けよ、

この部分は 厚地の＜ファスチャン織り＞の如く 誇張された、そして多分
 に搾手的要素をもつ。

そして この詩は これに続くの数篇においても ——そこでは 数世紀にわたってのダンテの予言的ヴィジョンが イタリアそしてヨーロッパを悩ますだろう終極的結末を 一つ一つ 列挙しているが、—— 多少ダンテのヴィジョンを抜きとってはいるものの、この部分でもさらに 執拗に 妄想的 強迫観念が固執されている。

1819年8月25日付で ^{ボローニア}Bologna から テレサに宛て バイロン は書き送っている。

＜僕は この本を 貴女の館の庭園の中で読んだ。^{いと}愛しい人よ、貴女が不在だったから全部読み了えたが もし そうでなかったら読了できなかったでしょう。その本は 貴女のア読書で その著者は 僕の友人だった。 貴女にはこの英語は難解で 他の連中にも 難解でしょう——そういう^{わけ}理由で 私がその意味を イタリア語で走り書きして説明しなかったのです。

だが 貴女には 激しく貴女を愛している者の筆蹟は それが 誰の書いたものか わかるでしょう。 また貴女のものだったその本を読みながら 彼が唇のことだけしか考えることができなかった、ということは はっきりと貴女は 見抜くでしょう。

あのことは —— すべての国のことばで使はれて 美しい、だが 貴女の国のことば、イタリア語で ^{アモーレ}Amore ^{ミオ}mio (^{いと}愛い^{ひと}人よ、)と ^{ささや}私語かれるとき最も美しい ^{ひび}響きをもつが—— の中に、この地での、そして今後の僕の生活のすべてが 含まれています。

僕は この地で 生活していることをこの身にしみじみと 実感します。しかし 今後も、この地での生活をずっと続けうるか どうか には不安があるのです ——＜いかなる目的にむかって＞ 今後 この地での生活を^{ぼく}ぼくが続けるかは ^{貴女}貴女が ^{決める}決める のですよ。 だがら ^{ぼく}ぼくの将来の命運は

もっぱら 貴女にかかっているのです —— 芳紀17才の しかも 修道院 convent
を了えて、わずか2年しか経^たっていない うら若い女性の貴女に。僕は い
ま思う、心をこめて —— 貴女が ずっと修道院に留まっていたら よか
ったのにな— と。そして 既に 結婚している貴女に、 少くとも、ぼく
がめぐり合はなかったらな—と 思はれてなりません。

だが、すべては 手遅れなのです。ぼくは 貴女を愛した。そして あな
たも ぼくを愛した。そして 愛人として ぼくを貴女は愛しています。
そして そのことが、とにも かくにも、ぼくにとって 一つの 大きな な
ぐさみ となっています。しかし —— ぼくは、貴女がぼくを愛する以
上に、もっともっと貴女を愛しています。そして 貴女への愛を絶ちきるこ
とは できないのです。だから、あの、アルプスの山々が そして 大海原が
ぼくたち二人を へだてていようと、ときには ぼくのことを思い出してく
ださい。だが —— 貴女に ぼくへの愛があるかぎり 千里万里^{へだた}の隔り
も あらゆる障害も ぼくたちをひき離すことはできないでしょう。＞

愛の展界において —— バイロンはダンテと大いに共通点をもつが、少
くとも 若い頃の理想主義においては —— つきまとう＜追放＞のテーマ
に触れて 失敗している。

＜真摯とやさしさ＞をもって、効果的にはじまる次の章が 構成的に 韻律的
に 第5行以下 衰へゆくのに注目してみよう。

Since my tenth sun gave summer to my sight
Thou wert my Life, the Essence of my thought,
Loved ere I knew the name of Love, and bright,
Still in these dim old eyes, now overwrought
With the World's war, and years, and banishment,

And tears for thee, by other woes untaught;
 For mine is not a nature to be bent
 By tyrannous faction, and the brawling crowd,
 And though the long, long conflict hath been spent
 In vain—and never more, save when the cloud
 (Which overhangs the Apennine, my mind's eye)
 Pierces to fancy Florence, once so proud
 Of me, can I return, though but to die,
 Unto my native soil, —they have not yet
 Quenched the old exile's spirit, stern and high. (I, 28–41)

10才の夏の陽射し ^{ひざ}眩しかりしときゆ
 汝わが命 わが思想の核とはなれり
 愛という名を知らざる前に——そして明るく

いまも、——かすめる老の目に だが疲れ果てたり
^{たたかい}闘争と 寄る年波と 追放の身に
 汝を恋う涙ゆえ ^{くまぐさ}種々の不測の歎きゆえ

わが恋は鎮^{しず}もるものに非ず
 暴虐な徒労と 騒然たる民衆のゆえに
 そして長い長い^{たたかい}闘争の日は続いた。

だが無益に——だがもうこない——アルペンの山に
 懸かる雲を わが眼の貫ぬきて
 吾^あをかつて誇りしフローレンスを想うときのみ。

帰れるだろうか 故郷の土へ——まだ療^{いや}されぬ

そのときは 死を迎ふ日のみ
追放の魂^{こころ}、厳しく孤高に われ老いし

老いし、追放者ダンテ は みづからの魂を＜stern and high＞ とは描か
なかったであろう。 しかし 若き追放者 バイロンは溢れるばかりの自己憐
愍の＜号泣＞のゆえに かかる疑念は抱いていない。

バイロンは 1819年、＜The Prophecy＞とともに ラヴェンナで かいた
もう一つの詩《ポー河によせる歌》《Stanzas to The Po》の中で より確信
的注目が 心に浮んだ

1820. 6. 8 のホップハウス宛の手紙の中でこれは ＜ひどく興奮状態 に
かられて真剣に＞ “in red-hot earnest” にかいたものだ と述べている。 し
かし この詩からは 熱情をこめたムードは全く伝わってこない。 実に——
不思議に非人格的な詩である。それは 一群の 《the Lady of my love》
《perchance》《faint and fleeting memory》 など 擬古体語句で始まる。
だが 次の一節 では改まっている。

STANZAS TO THE PO.

1.

RIVER, that rollest by the ancient walls,
Where dwells the Lady of my love, when she
Walks by thy brink, and there, perchance, recalls
A faint and fleeting memory of me:

2.

What if thy deep and ample stream should be
A mirror of my heart, where she may read
The thousand thoughts I now betray to thee,

Wild as thy wave, and headlong as thy speed!

ポー河によせる唄

1.

河よ、古城のほとり 流れゆく

恋人のそこにすみ

その岸辺 歩むとき

ふと吾に蘇^ある、はかなき思出^{かえ}

2.

汝^{ゆたか} 豊にたたえる流^{なれ} もし、汝、

わが 鏡なら わが妹^{いも}は 映しみむ

わが想 汝に露^{あか}す 千千^{くきぐき}の、

汝が波の猛り 汝が奔流^{はや}の疾きが如き

それは ^{テレサ} Teresa へ叫びかけた＜バイロン自身の心＞のうたである。 そして もし ^夢 《The Dream》—— 1816年作、^{メアリ} Mary ^{チヨワース} Chaworth への恋をうたった——が バイロンにとって ワーズワスの《Tintern Abbey》—— 1798年作。自然美を通し 神を認めた厳肅な神秘さをうたった——であるとするれば、この《Stanzas to the Po》は 《The Immortality Ode》—— 1802～4年。ワーズワス作。生れながらの敬愛 (natural piety) は年と共に鈍るが、その追想が自然への融合をもたらすことを歌った。 この朗読をきいて ^{コウルリッジ} Coleridge が《‘Dejection’》をかいいた——いや、さらに、《Dejection》の詩想へと接近してゆく。

というのは これは哀歌であり バイロンにとって 今はもう消えうせた 溢れた力と哀えた情熱^{エレジー} を歎く悲歌 であるから。

それらの 力 が 情熱 が ポー河《the Po》の如く かつては騒々しく バイロンの心の中で揺れ動いた 過ぎゆきし日日を バイロンは哀悼の情 絶

ちがたく ふり返るのだが、
いまは——

3.

What do I say—a mirror of my heart?
Are not thy waters sweeping dark, and strong?
Such as my feeling were and are, thou art;
And such as thou are were my passions long.

4.

Time may have somewhat tamed them, —not for ever:
Thou overflow'st thy banks, and not for aye
Thy bosom overboils, congenial river!
Thy floods subside, and mine have sunk away:

5.

But left long wrecks behind, and now again,
Borne in our old unchanged career, we move;
Thou tendest wildly onwards to the main,
And I—to loving one I should not love.

.....
.....
.....

時が 猛りたるものを馴らせしか——永遠ならねど。
汝は 汝が岸に溢れしものぞ——常にはあらねど。
汝が胸は 荒び猛りし 吾が性に似たる河よ、
汝が洪水の干きしとき 吾が熱き情も冷えし。

さはれ いま残骸を曳きつつ ふたたび

進みゆく いとしき^{かわ}渝らざる 流れこし^{みち}水路を。

汝は あらあらしく ^{うみ}大海へとむかい

吾は——^{ひと}世間許さざる 愛するもの恋うて。

ワーズワス——コウルリッジの 自然觀的美学が—— < I see, not feel,
how beautiful they are >

<それらが いかに美しきものか
感じるにあらず いま ^み観える>

バイロンの 情感へと ここで 置き換えられている。

< Such as thou art were my passions long >

< 汝 いまの^{すがた}相よ 吾に長く揺れし^{こころ}情熱なりし>

6.

The current I behold will sweep beneath

Her native walls, and murmur at her feet;

Her eyes will look on thee, when she shall breathe

The twilight air, unharmed by summer's heat.

7.

She will look on thee, —I have looked on thee,

Full of that thought: and, from that moment, ne'er

Thy waters could I dream of, name, or see,

Without the inseparable sigh for her!

8.

Her bright eyes will be imaged in thy stream,——

Yes! they will meet the wave I gaze on now:
 Mine cannot witness, even in a dream,
 That happy wave repass me in its flow!

9.

The wave that bears my tears returns no more:
 Will she return by whom that wave shall sweep?—
 Both tread thy banks, both wander on thy shore,
 I by thy source, she by the dark-blue deep.

10.

But that which keepeth us apart is not
 Distance, nor depth of wave, nor space of earth,
 But the distraction of a various lot,
 As various as the climates of our birth.

だが われらをひき離すものは
 へだたりでなく 波でもなく 空間でもなく
 種々の 運命の 班氣 のまま
 育いたちし風土の さまざまなりしごと

それなら、この詩は ちぐはぐだ。 バイロンが河をうたった 唯一のこの
 詩の中で、バイロンが、むしろ 散漫に さぐりあてようと求めているのは
 新しい生への可能性、 方向づけ ではないのか？

だが その 結びの節は Missolonghi^{ミソロンギ}——死地を求めてギリシャ独立軍を
 指揮した地——をびたりと 指し示している。

11.

A stranger loves the Lady of the land,
Born far beyond the mountains, but his blood
Is all meridian, as if never fanned
By the black wind that chills the polar flood.

12.

My blood is all meridian; were it not,
I had not left my clime, nor should I be,
In spite of tortures ne'er to be forgot,
A slave again of love, —at least of thee.

13.

'Tis vain to struggle—let me perish young—
Live as I lived, and love as I have loved;
To dust if I return, from dust I sprung,
And then, at least, my heart can ne'er be moved.

June, 1819.

[First published, *Conversations of Lord*

Byron, 1824, 40, pp.24-26.]

あらが 闘争うことの^{むな}虚しさよ——若くして逝かむ——
かく生きて かく恋したれど
帰りゆくものなれば わが生れしあの塵へ
そしてそのとき 吾が心 揺らぐことはあるまじ

《Childe Harold》の中で 《the Tales》の中で バイロンは——

神経を病み 道に迷い ロボトミー（脳前葉切除手術）を バイロン み
ずからの メスで 執刀しつつあるのだ ということをその病めるところを

探りあてつつあるのだ ということを 悩みつつ 痛みつつ 綿綿と 詩^{うた}っている。 つまり——

これらは 同一のことをのべる バイロン自身のやり方であった。

それを どのように ことばで表現しようとも 明^{あき}らかにされることは バイロンが

精神的な郷^{くに}から 貧しい郷^{くに}へと通ずる一本道を———ワーズワスと コッ
ルリッジの歩んできた長い道、巡礼、遍路の修行道を 束^{つか}の間に 走り了^おえた
ということである。

しかし バイロンは その路^{みち}を踏破した。バイロンなればこそ、その胸にひ
しとかき抱く＜浄らかなエネルギーの泉＞ ゆえにこそ、その みちを踏破し
えたのである。

エネルギー源は そこにあった。／ だが——

それが かつては そこから流出した その水路は 絶たれ 塞^{ふさ}がれてしまっ
た。／

多くの劇詩や《Beppo》や《Don Juan》の中で バイロンは 魔力的 凄^{すさ}
まじい 推進力で新しい水路を切り拓^{ひら}いてゆく。しかしそれは 以前に較^{くら}べ
れば より浅い、より狭いものとなってゆく

このバイロン観をさらにすすめるならば——

たそがれ
黄昏ゆきし日のバイロンの相^{すがた}は＜流浪者＞であり、 今や＜分身的 断片的
バイロン＞であるが故に そう観じられるのである。

移り変わりゆかむとする希望の曙光がほのかにさした日の、あの時点で——
 ——それは アナベラと結ばれて 幸福な前途の展望が 見えた あの束の間
 だったのだが、—— そのとき バイロンの〈全面的バイロン〉、バイロン
 にとって 高く聳ゆる山山が バイロンの〈ひとつの感覚〉であり、人間的も
 ろもろの感覚を はてしなく冷然とくり展げて生きてきた、全てを知覚したバ
 イロン とプツリと 絶縁した。

バイロンの〈流浪〉の唄の中でバイロンは〈追放者〉、であり、〈絶望〉、
 そして〈浮草のただよう相〉を 露呈する。

晩年の諸の劇詩、長編詩《Don Juan》《The Island》の中で そしてさ
 らに《The Vision of Judgement》の中で バイロンは〈断片としてのバイロ
 ン〉であった。 それ故に 晩年の作品はすべて この観点において バイロ
 ンの心情を 眺めればよいだろう。

(流浪の唄——完)

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford, Byron: Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge. The Poetical Works of Lord Byron: Lewis
 Prints.
- 3) Leslie A. M Archand, Byron's Poetry: John Murray.
- 4) Bernard Blackstone, Byron: Longman.
- 5) John D. Jump, Byron: Routledge & Kegan Paul.
- 6) Lafcadio Hearn, The English Romantic Poets: 北星堂.